

春まきリーキの育苗法と栽植密度

山村 真弓・佐々木丈夫・大沼 康・小野寺康子

(宮城県園芸試験場)

Raising Seedling Methods and Planting Density of Leek (*Allium Porrum* L.) on Spring Sowing

Mayumi YAMAMURA, Takeo SASAKI, Koh OHNUMA and Yasuko ONODERA

(Miyagi Prefecture Horticultural Experiment Station)

1 はじめに

リーキは西洋ネギ、ポロネギとも呼ばれ、フランス料理に欠かせない食材であり、洋食志向の影響で日本での需要も伸びている。リーキは寒さには強いが高温には弱いため、本県の夏期冷涼な気象に適した品目のひとつと思われるので、春まき栽培での播種期と育苗法、栽植密度について検討した。

2 試験方法

(1) 播種期と育苗法

1994年1月11日から20日おきに4月21日まで6回播種し、各播種期とも地床(条間20cmの条まき、株間1~2cmに間引き)及びセルトレイ(200穴タイプ、1セル当り2本仕立て、用土はセル専用土)で育苗(各々の苗を地床苗、セル成型苗と呼ぶ)した。温度管理としてパイプハウス内で無加温と加温区を設置した。無加温区は夜間トンネルを保温マットで被覆し、0℃以下にならないように管理した。加温区は最低気温5℃、地温15℃に設定した。定植は地床苗は本葉が3枚程度展開した時期に、セル成型苗はセルからの抜き取りが良好となった時期に行った。うね幅を90cmとし、地床苗は1カ所1本植えて株間12.5cm、セル成型苗は1カ所2本植えて株間25cmとした。

(2) 栽植密度

試験は1993年に行った。うね幅を90cmとし、株間を5, 10, 15, 20, 25cmで1カ所1本植え(a当りの株数はそれぞれ2222, 1111, 740, 556, 444株)と株間25cmで1カ所2本植え(同888株)及び株間30cmで1カ所3本植え(同1, 111株)で6月9日に定植した。供試した苗は3月31日に播種し、地床で育苗した。

各試験とも、品種は「ワンダー」を供試し、収穫まで2回追肥、土寄せした。施肥量はa当り成分で、N-3.0kg, P₂O₅-2.6kg, K₂O-2.9kgとした。試験規模は1区7㎡、2反復で行った。

3 試験結果及び考察

(1) 播種期と育苗法

無加温区の発芽揃い期、定植期の生育、収穫始期及び収量等は表1のとおりである。発芽揃いまでの日数は地床、セルトレイとも1月11日、2月1日播種では20日程度、2

月21日、3月11日播種では16日程度、3月31日、4月21日播種では10日程度であった。定植期までの育苗日数は播種期が遅くなるほど短くなる傾向であった。定植期の生育は地上部重、地下部重から地床、セルトレイとも66日以上育苗で良好であった。播種期が同じ場合、地上部重は地床育苗で重く、地下部重はセルトレイ育苗で重くなった。7月21日の生存株率は両育苗とも1月11日から3月11日播種までは94%以上であったが、3月31日、4月21日播種では66%以下とかなり低かった。収穫始期は播種期が早いほど早くなる傾向がみられた。a当り収量は播種期、育苗方法による明らかな差はみられず、130kg程度であった。

表1 播種期、育苗法の違いと定植時の生育、活着率、a当り収量等(無加温育苗, 1994年)

播種期 (月・日)	育苗法	発芽 揃い期 (月・日)	定植 月日 (月・日)	育苗 日数 (日)	地上 部重 (g)	地下 部重 (g)	活着 率 ¹⁾ (%)	収穫 ²⁾ 始期 (月・日)	a当り 収量 (kg)
1.11		2. 1	4.18	97	1.31	0.31	100	11上	120
2. 1		2.21	4.18	77	0.92	0.27	96	11上	110
2.21	無加温	3.10	4.28	66	1.18	0.37	98	11中	154
3.11	地床	3.26	5.26	76	1.94	0.57	94	11下	128
3.31		4.10	5.26	56	0.82	0.22	48	12上	108
4.21		5. 1	6. 8	48	0.37	0.08	43	12上	86
1.11		2. 1	4.18	97	0.13	0.43	94	11上	132
2. 1		2.18	4.18	77	0.16	0.40	98	11上	111
2.21	無加温 セル トレイ	3. 9	4.28	66	0.16	0.50	100	11中	132
3.11		3.26	4.28	48	0.21	0.33	98	11中	131
3.31		4. 9	5.26	56	0.12	0.24	38	12上	84
2.21		4.30	6. 8	48	0.16	0.26	66	12上	121

注. 地上部重、地下部重: 生重量

1) 7月21日の生存株数/定植株数×100

2) 収穫可能な生育と思われた時期

a当り収量=1株当り平均調整重量×a当り栽植株数×生存株率

加温区は気温、地温の推移から3月下旬以降無加温区とほぼ同様となったので、3月11日播種で試験を打ち切った。加温育苗の結果を表2に示した。発芽揃いまでの日数は播種期にかかわらず、地床育苗は12日程度、セルトレイ育苗は10日程度であった。定植期までの育苗日数は播種期が遅くなるほど短くなる傾向であった。定植期の生育は地上部重、地下部重からみて地床、セルトレイ育苗とも1月11日から2月21日播種までは良好であったが、3月11日播種はやや生育が劣った。播種期が同じ場合、地上部重は地床育苗で重く、地下部重はセルトレイ育苗で重くなった。7月

21日の生存株率は地床育苗の3月11日播種区とセルトレイ育苗の1月11日播種区が89%とやや低かったが、その他の区はほぼ95%以上であった。収穫始期は播種期が早いほど早くなる傾向がみられた。a当り収量は播種期、育苗方法による明らかな差はみられず、130kg程度であった。

表2 播種期、育苗法の違いと定植時の生育、活着率、a当り収量等(加温育苗, 1994年)

播種期 (月.日)	育苗法	発芽 期 (月.日)	定植 期 (月.日)	育苗 日数 (日)	地上 部重 (g)	地下 部重 (g)	活着 率 ¹⁾ (%)	収穫 ²⁾ 始期 (月.日)	a当り 収量 (kg)
1.11		1.23	4.18	97	2.62	0.59	96	10中	133
2.1	加温	2.14	4.18	77	1.02	0.27	94	10中	106
2.21	地床	3.3	5.26	94	0.95	0.27	95	10下	143
3.11		3.23	5.26	76	0.34	0.07	89	11中	136
1.11	加温	1.20	4.18	97	0.12	0.42	89	10中	134
2.1	セル	2.12	4.18	77	0.11	0.46	99	10中	150
2.21	トレイ	3.2	4.18	56	0.13	0.44	94	10下	148
3.11		3.19	4.28	48	0.09	0.35	96	11上	133

注. 表1と同様

以上の結果、播種期が遅いと充実した苗が得られず、早いと育苗日数が長くなるため、2月下旬～3月中旬の播種が適当である。パイプハウス内で無加温とし、65～75日程度育苗する。苗質は異なるが地床でも、セルトレイでも育苗可能である。加温育苗は収穫始期を早めたい場合に有利で、2月上旬に播種し、65～75日程度育苗し、10月中旬から収穫可能である。

(2) 栽植密度

a当り収量及び規格別収量割合を図1に示した。a当り収量、可販収量は栽植株数が多いほど多かったが、同時に葉鞘径が細いものの占める割合が高まり、規格外品の割合

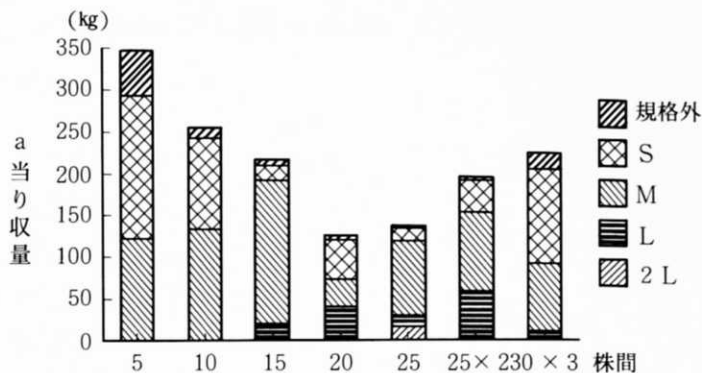


図1 栽植密度別による規格(葉鞘径)別a当り収量(1993年)

注. 規格(葉鞘径) 2L: 5.0cm以上, L: 4.0～5.0cm
M: 3.0～4.0cm, S: 2.0～3.0cm
外: 2.0cm未満及び茎の曲がり、裂け等のあるもの

も高くなる傾向がみられた。株間5cmの1カ所1本植え区と株間30cmの1カ所3本植え区は全体的に茎が湾曲する傾向がみられた。

以上の結果、収量・品質の面から株間15cmの1本植え、又は株間25cmの2本植えが適当と思われた。

4 ま と め

夏期冷涼な気候に適した作物であるリーキの春まき栽培における播種期、育苗法、栽植密度について検討した。

播種期は2月下旬～3月中旬で、育苗は地床でも、苗の移動が容易なセルトレイでも可能であった。パイプハウスを利用して無加温育苗し、最低気温が0℃以下にならないように管理する。育苗日数は65～75日程度であった。栽植密度はうね幅90cmの場合、株間15cmの1本植え、又は株間25cmの2本植えが適する。11月中旬から収穫できる。